

シュライアマハー

— その神学の構造 —¹

Schleiermacher: The Construction of His Theology

水谷 誠
Makoto Mizutani

キーワード

シュライアマハー、プロテスタント神学、学知、牧師、敬虔、宗教

KEY WORDS

Schleiermacher, Protestant theology, science, minister, piety, religion

要旨

日本におけるフリードリヒ・シュライアマハーの紹介、研究は古くからなされてきたが、彼の神学思想の研究は進展しているとは言い難い。しかし、近代プロテスタント神学の父と称されるシュライアマハーの本領は、近代的精神に対応する神学の再構築にあった。この論考では、人間存在一般の省察を背景にした宗教（敬虔）の再認識、一般（世俗的）諸学の有機的共同体としての、かつ本質と現象との対話を志向するものとしての神学の構造を、彼の主たる著作に依拠しつつ明らかにする。

SUMMARY

Although Friedrich Schleiermacher has been known and studied in Japan for many years, the study of his theological thought has not seen much progress. Schleiermacher, who is regarded as the father of modern Protestant theology, was primarily concerned with reconstructing a theology that corresponds to the modern spirit. In this lecture, by drawing upon his major works, I clarify the structure of theology as a reaffirmation of religion, or piety, against the backdrop of a reflection on human existence in general, as

an organic cluster of general secular studies, and as a framework oriented toward a dialogue between essence and phenomenon.

1. はじめに
2. 紹介
 - 2.1. シュライアマハーは神学者であった
 - 2.2. シュライアマハーは牧師であった
3. 理論的構造
 - 3.1. 三段構え — 人間一般・敬虔一般・キリスト教的敬虔 —
 - 3.2. キリスト教的敬虔（本質）と敬虔共同体（歴史現象）の不断の対話
4. キリスト教神学
 - 4.1. キリスト教神学は、一般（世俗的）諸学問を結集して、キリスト教的敬虔と敬虔共同体（教会）の健康を維持しようとする学問的営みである
 - 4.2. キリスト教神学の構成
 - 4.2.1. 哲学的神学
 - 4.2.2. 歴史的な神学
 - 4.2.3. 実践的神学
5. 伝統的教義学とシュライアマハーによる神学の再編
 - 5.1. 聖書靈感説に基づく伝統的教義学
 - 5.2. キリスト教的敬虔に基づくシュライアマハーの神学
6. 結び

1. はじめに

まず最初にシュライアマハー（Friedrich Daniel Ernst Schleiermacher, 1768–1834）を簡単に紹介いたします。と言いますのは、私や私の先生の世代にいたるまでは一般に日本ではシュライアマハーは大きな関心事でありました。京都大学のキリスト教学講座初代の教授であった波多野精一は、その著作『宗教哲学序論』ではひとつの節を当てて「シュライエルマッヘル」を論じ、『宗教哲学』冒頭ではその「高次の実在主義」に言及することで本文を始めています²。また、その門下生の石原謙はシュライアマハー青年期の代表的著作である『宗教論』（『宗教について。宗教を軽蔑する者たちのうちの教養人に向けての講演』初版を本邦で初めて日本語に翻訳いたしました。これはすぐれた訳業であり、その後繰り返しなされてきた『宗教論』初版の後続する各

邦訳の、今にいたるも模範になっているものと言えます³。要するに、シュライアマハーは当初は宗教哲学者として日本に紹介され、キリスト教にとどまらず宗教一般の本質を「宇宙の直観と感情」であるとする『宗教論』（初版）が持つ広い視界に関心が向けられ、これもまた多くの邦訳版が繰り返し出されてきた『独白録』などとともに「我が国においてはドイツの哲学、思想、文学の研究者によって、早くから関心がはらわれてきた」ということができます⁴。また、教育学の分野でも早くから紹介がなされ、その後も継続的な関心を集めています。現在の日本では、一般に宗教一般の本質を考究した宗教哲学者としての側面、19世紀ドイツの大学ならびに教育改革の担い手、近代的な教育学や解釈学のパイオニア、また教会合同運動を指導・推進し、プロイセンの宗教政策にも関与した教会政治家⁵、プラトンの古典的翻訳者などとして知られています。神学関係では、とりわけ1960年代より関心が深まる中で紹介や研究も徐々に増えてきました。しかし、日本におけるカール・バルトを中心とした弁証法神学運動の紹介とその視点からの近代プロテスタント神学批判の影響を受けて十分な展開を見せてこなかったのが現状です。

2. 紹介

2.1. シュライアマハーは神学者であった

近年になると徐々に詳しい個別研究も公にされてきているにせよ、若い人たちの中には彼の名前そのものを知らない人々も出て来ています。しかし、パウル・ティリヒは彼のことを「近代プロテスタント神学の父」だと表現して最大限の賛辞を送っていますし、ある研究者は初代教会の教父になぞらえて、シュライアマハーを「19世紀の教会教父 (Kirchenvater)」と称した本を書いています⁶。さらにカトリックの神学者ロベルト・シュタルダー (Robert Stalder) は、1969年の著作の序言で19世紀カトリック・テュービンゲン学派を代表する神学者クーン (J. E. von Kuhn, 1806-1887) の言葉「古今の神学者すべてのうちで、その学問的力量においてトマス・アキナスに肩を並べるのはシュライアマハー以外にない」という言葉を引用して、その思いを深くすると記しています⁷。

つまりシュライアマハーはキリスト教神学、とりわけプロテスタント神学の世界において高く聳える高峰であると言って差し支えない存在なのであり、プロテスタント・キリスト教の神学思想・信仰思想を理解する上でかけがえのない存在であることに疑いはないのです。それゆえに、シュライアマハーはまずもって神学者であったということを申し上げねばなりません。なぜなら、一般にキリスト教界を除けば、日本ではシュライアマハーは宗教哲学者であり、教育学者であり、近代解釈学のパイオニアであるというように、神学プロパーの領域の外側の思想家として関心が向けられて

きたからです。

シュライアマハーは1804年から1807年までハレ大学神学部教授に迎えられ、ナポレオンの侵攻による大学閉鎖まで実質的には1806年までの4学期を教え、また1810年から亡くなる1834年までおよそ四半世紀にわたって、自らもその創立に参画し、近代的な高等教育と研究を目的として設立されたベルリン大学の神学部で教えました。その、長い年月の中でなされた諸講義の内容は多岐にわたっています。シュライアマハーは神学部教授として神学の講義を続けるとともに、ベルリンではプロイセン王立学術アカデミー会員の権利を行使して哲学部（文学部）でも教えました。全体としては5部門で構成され、1980年に『信仰論』（初版、1821/22）が刊行されて以来、現在も編集・公刊が続いている新版のシュライアマハー全集（*Kritische Gesamtausgabe*、略称KGA）の第2部門はこれらの講義ノート類の編集に当てられています⁸。最初に、神学関係の講義内容を列挙すれば、「神学諸科解題」、「教会史」、「キリスト教哲学史」、「キリスト教信仰論」、「キリスト教倫理論」、「教会地理学・統計学」、「実践神学」、「新約聖書入門」、「イエスの生涯」、「福音書における受難と復活物語」、「マタイによる福音書」、「ルカ文書」、「ヨハネによる福音書」、「パウロ書簡」、「公同書簡」、「ヘブライ人への手紙」。さらに、哲学関係を列挙すれば、「哲学的倫理学」、「心理学」、「解釈学と批判」、「教育学」、「国家論」、「美学」、「弁証法」、「ギリシア哲学史」など。要するに神学関係では、旧約聖書以外の全神学分野を視野に収めた講義活動を展開しているのです⁹。

これら神学関係の諸講義に対して哲学関係のものにはどのような意味があり、また位置づけがなされているのでしょうか。少しばかり注意して眺めてみるならば、彼が哲学部で講義した諸科目の主眼は、神学という学問の体系を構築し展開するための、言わば予備的、基礎的作業というべき性格を持っていることが分かります。たとえば、教育学は単なる学校教育の理論にとどまらず、宗教共同体における人間の育成（*Bildung*）の理論に繋がっていくものでありますし、また解釈の技術たる解釈学は、W. デイリタイ以来哲学研究者の関心を集めその解明が進められてきましたが、そもそもシュライアマハーにとってそれは聖書のテキストを理解するための技術という仕方では聖書釈義と関連する理論でありました。さらに、人間存在一般を探究する学としての哲学的倫理学（*Philosophische Ethik*）や、それら個別の諸学を成り立たしめる学知（*Wissenschaft*）とはそもそも何なのか、そして学知が取り扱う知（*Wissen*）とは何なのかといった原理そのものを探究する弁証法（*Dialektik*）と言われる講義を繰り返し試みてきましたが、それらは彼の神学的作業の前提となっているものです。このあたりに関心を持っていたということは、ドイツ観念論（*Deutscher Idealismus*）の環境世界にシュライアマハー自身も身を置いていた証であるということもできま

す。このシュライアマハーの弁証法について日本における本格的な解明を志した研究が、神学部で教鞭を取っておられる伊藤慶郎先生によって公にされています¹⁰。いずれにしても、シュライアマハーはキリスト教とともに、宗教性の中に生きる人間存在一般について思索を深め、それら相互の諸関連を念頭に置いた壮大な学知の体系を構築した神学思想家であったのです。

2.2. シュライアマハーは牧師であった

しかし、この四半世紀を超える神学教授としての活動の土台にあったのは、教会担任牧師としての彼の活動でした。この側面は日本ではまだほとんど知られておらず、私の知る限り、白水社の『現代キリスト教思想叢書1』の「シュライアマハー」の中に6篇の説教の邦訳他があるのみであり、研究論文もわずかです¹¹。そのような関心の低さにもかかわらず、敢えて申し上げますと、シュライアマハーの神学思想家としての背景にはまずもって牧師としての実践的活動があり、礼拝で説教活動を生涯にわたって続けたことを無視することはできません。

実際、シュライアマハーは1790年の第一神学試験の際の課題説教に始まり、1794年からのランツベルクの代務牧師（*Hilfsprediger zu Landsberg an der Warthe*）、1796年からのベルリンのシャリテ付牧師（*Prediger an der Charité in Berlin*）、1802年からのシュトルプでの宮廷牧師（*Hofprediger in Stolp/Hinterpommern*）、1804年からのハレ大学付牧師（*Universitätsprediger in Halle*）、そして1808年から生涯を閉じる1834年までの間のベルリン三位一体教会改革派担当牧師（*Prediger an der Dreifaltigkeitskirche*）として、実に40年を超えて説教壇に立ち続けたのです¹²。

その生涯においてなされた説教ですが、確認された回数は3500回を超えます。40年間の日曜日の数は2000余りでそのうちの三分の二弱ですから、単に日曜日の主日礼拝や早朝礼拝にとどまらず、それをはるかに超えて週日も記念説教や晩祷、葬儀他、必要に応じて説教を続けてきました。そして彼の生涯の後半を過ごしたベルリン大学教授時代には三位一体教会（*Dreifaltigkeitskirche*）で毎週礼拝説教を担当しましたが、名声を博した晩年になると1600席あるこの教会を満堂にして説教を続けたのです。先ほど申し上げた新版全集の第3部門に収録されている説教は1500あまり、テキストの総頁数は14000頁に迫ります。シュライアマハーの説教思想の研究は、従来必ずしも活発ではありませんでしたが¹³、今後は、抽象的な理論と形式に傾く神学体系・学問体系の内実にかかわる具体的なシュライアマハーのキリスト教信仰思想に踏み込んでいくには、彼の説教思想の解明は欠かすことができません。研究の進展が、今後、大いに期待されるところです。

3. 理論的構造

3.1. 三段構え — 人間一般・敬虔一般・キリスト教的敬虔 —

さて、シュライアマハー神学の土台となる学問構造の特質として、「三段構え」という表現を使いました。シュライアマハーの本領は、申し上げたようにキリスト教の神学体系の構築でありました。つまりキリスト教的敬虔（キリスト教信仰）にかかわる学問的・神学的体系の構築に彼は精力を傾けました。しかし、シュライアマハーはただ単にこのキリスト教的敬虔そのものだけに集中して、それを理論的に解明・表現する学問としての神学を構築したのではなく、キリスト教的敬虔とこの敬虔を土台にして歴史世界に登場したキリスト教敬虔共同体（キリスト教会）を取り扱うために、その前の段階をも課題として取り上げます。つまり、キリスト教的敬虔もそのうちに含まれる人間の宗教性一般、つまり敬虔一般を論じます。換言すれば、彼はキリスト教という個別宗教を取り扱う前に、キリスト教にとどまらず宗教一般に現れた敬虔（Frömmigkeit）というものの本質的特徴を取り扱います。

このあたりの事情を1799年に出版された『宗教論』は、「宗教の本質は直観と感情である」、「宗教とは無限なるものを感じ味わう心である」と表現しています¹⁴。この「宗教」という概念は後の『信仰論』（1820/21初版、1830/31第2版）では、敬虔と言い換えられて「敬虔とは知識でも行為でもなく、感情の一樣態、換言すれば直接的自己意識の一樣態である」「この敬虔の本質は、我々が我々自身を絶対的に依存しているものとして、つまり神と関係にあるものとして意識していることである」と定義します¹⁵。

ここで言われている「宗教」とか「敬虔」という概念は、キリスト教だけでなく諸宗教一般の本質的要素として現れるものを表現しています。そして、この宗教的意識の中の、とりわけ一つの特殊の、固有の敬虔をキリスト教的敬虔だとするのは、そのキリスト教的敬虔固有の特徴は、『宗教論』（初版）の、諸宗教を取り扱った第5講に出てきますが、「墮落と救済」あるいは「敵対と和解」というパラダイムにあると指摘します¹⁶。後年の『信仰論』では、ナザレのイエスによってもたらされた救済に関係する意識だと定義しました¹⁷。要するに、宗教一般の本質を扱う段階とその中の一つの宗教であるキリスト教固有の敬虔を扱う段階を区別するのです。

このような段階づけはさらにそれら宗教一般に見られる敬虔の土台となる段階をも前提にしています。人間存在はそもそも宗教的ですが、人間存在に宗教性はつきものです。人間存在とはホモ・レリギオーズス（宗教人 *homo religiosus*）であると言っても差し支えないでしょう。しかし、この宗教人たる人間存在自体は宗教性以外に種々さまざまな人間としての資質や能力を身にまっています。先ほどの『信仰論』第3命題では、思考活動（知識）や倫理的営為（行為）を掲げて、それを人間存在が本質

的に有する敬虔とは異なる精神能力であると語っています。『宗教論』においても同じくそれは思考でも行為でもないと言っています¹⁸。そうすると、人間存在とはそもそも何なのかという根本的な問いかけが登場します。これはもはや敬虔そのものではなく敬虔という側面をも内に含む人間存在一般に対する問いかけであり、これをシュライアマハーは哲学的倫理学 (Philosophische Ethik) の課題であると考えました¹⁹。倫理学とは、シュライアマハーの場合、人間存在一般の地上世界での営みを思弁的、反省的に探究する学だということになります²⁰。こうして、シュライアマハーの学問的作業は、①人間存在一般、②人間存在に不可欠の要素としての宗教性、③宗教的生の中のとらわけキリスト教的な宗教性という三つの段階のそれぞれでなされていくこととなります。それが「三段構え」という表現で申し上げた事柄です²¹。

3.2. キリスト教的敬虔（本質）と敬虔共同体（歴史現象）の不断の対話

それではキリスト教的敬虔とその集合体（キリスト教会・キリスト教敬虔共同体）を探究するために、シュライアマハーはどのような構造を持つ学問を提供しているのでしょうか。それがこの節のもう一つの主題であるキリスト教的敬虔と敬虔共同体の不断の対話であり、本質や理念的次元と人間の歴史的経験に現れる具体的事象との間の不断の対話ということです。キリスト教は現実にこの地上世界に存在しています。他宗教もまた同じです。この人間の営みを通じて歴史世界に成立する宗教は、決して天上の世界に存在する本質そのもの、理念的在りようを完備しているわけではありません。しかし同時に、本質的な意味で宗教そのもの、敬虔そのものがそこに含まれていなければ、それを宗教、敬虔共同体と言うことはできません。

歴史現象としてのキリスト教敬虔共同体（教会）、これはキリスト教的敬虔の本質を反映しているけれども、本質そのものの具現ではなく、敬虔以外のものに由来する種々多様な要素を含んでいます。それゆえに本質と現象との相互批判的対話が不断に必要なってくるのです。『宗教論』初版では、天上の美と地上のみすぼらしい姿という形でこれを比喩的に説明しました。そこで語られていることは、たとえ地上のみすぼらしい姿であっても、その中に人は天上の美を発見すべきだという指摘です²²。地上世界の諸宗教には理念としての宗教そのものが具現しているわけではありませんし、また個別の宗教もその宗教独自の本質そのものを実現しているわけではありません。

繰り返しになりますが、歴史宗教には、具体的に外面からみると宗教とは思えないようなさまざまな要素が塵芥のように含まれています。それは人間という罪存在によって営まれていることによって生じる運命的な現象だと言えるでしょう。しかし、シュライアマハーはそのような姿であるにしても、その中に宗教そのもの、敬虔その

ものを発見すべきであると主張します。そうすると、理念として宗教そのもの、敬虔そのものを追究する学問的営みだけでなく、具体的に歴史に存在している敬虔共同体たる宗教自体をも批判的に探究していかねばなりません。彼の学問体系は、単なる思弁的な体系構造を持つものではなく、またその逆に19世紀に本格的に広まり、現代世界において主流となった実証主義的傾向、歴史化された次元でのみ学問形成をするわけでもなく、常に両者の対話の中で、両者が獲得した学術的成果を吸収しつつ両者を批判的に取り扱う学問体系の構築を試みるという姿勢を持っています。この一方の面である経験的実証的視点は、その後の宗教学の発展を準備するものであったと言えますし、その環境下にシュライアマハーも生きたドイツ観念論的思弁とは質を異にするシュライアマハーの独創性であると言うこともできるでしょう。

この歴史現象としての宗教を探究する作業は、具体的には「宗教哲学」(Religionsphilosophie) とシュライアマハーが命名した学問分野でなされます。これは現代における「比較宗教学」とでも言える内容を持つ分野になります²³。それぞれの個人の内面世界に着床した敬虔は、人それぞれ自ら固有の宗教性を発揮し、それぞれの敬虔のうちに通底する固有性に収斂する形で歴史的な各宗教、各宗教共同体(敬虔共同体・教会)が形成されていきます。宗教哲学とは、歴史に現れた具体的な姿を批判的に把握する試みとして実証主義的・歴史的に各宗教を取り扱う学問ということになります。つまり、彼の敬虔の理論では、思弁的に整理されて提出された敬虔という理念は、歴史世界では具体的な諸宗教の営みとして現れるがゆえに、実際のそれら敬虔諸共同体の諸形態とその内容の批判的研究が必要になってくるわけです。それが宗教哲学の課題となります。

宗教哲学が宗教一般の実証的探究であるとするならば、キリスト教そのものに目を向けた探究は「弁証学」(Apologetik) と「論争学」(Polemik) をとおしてなされます²⁴。弁証学は、キリスト教の真理性を扱います。いずれの宗教であっても自らの真理性を主張するわけですから、キリスト教の本質や原理を取り扱ってこの真理性の表現を探究する部門が弁証学ということになります。「弁証学」とは、古代の弁証家を念頭に置いた用語ですが、シュライアマハーにとっては、それは見知らぬ宗教世界にキリスト教を弁証してキリスト教の正当性を主張するための学問ではなく、キリスト教そのものの真理性、それが真実の宗教であることの探究という意味合いを持ちます。もちろん、キリスト教の内部ではグループに分れているのが現状ですから、それぞれのグループの本質や原理もまた同じ仕方で探究されねばなりません。

さらに、自らの宗教のこの本質的特徴を念頭に置いて、具体的な敬虔共同体が自らの本質や原理に忠実であるのか否か、それを純粹に表現しているのか否かを検討する部門として「論争学」(Polemik) という、これは教派对立時代に自らの真理性を主

張して他教派を論難するという意味合いを持った学の名前を転用させた部門が設けられます。キリスト教も、その中にあるプロテスタント・キリスト教もちろん、その真理性を主張するための弁証学と、それぞれの固有原理を純粹に表現しているか否かを吟味する論争学の部門が神学の中に置かれることになるわけです。

4. キリスト教神学

4.1. キリスト教神学は、一般（世俗的）諸学問を結集して、キリスト教的敬虔と敬虔共同体（教会）の健康を維持しようとする学問的営みである

それではシュライアマハーは神学全体をどのようなものと考えていたのでしょうか。まず、前提としておくべきは、神学という知的営為は敬虔それ自体の活動ではないことです。『信仰論』第2版の第3命題では、人間の精神能力を大きく三つに分類して敬虔を知識でも行為でもなく、感情の、厳密には直接的自己意識の一樣態であると規定しました²⁵。そこには信仰と学知（知識）との間の本質的相違ならびに相互関係が表現されています。神学とは直接的自己意識たる敬虔とそれに由来する共同体を対象として、人間のもう一つの精神能力である知識（知的営為）を行使して理論的反省的にそれを自己吟味する作業なのです。その意味では、キリスト教的敬虔とその中に生きる人々の群れが健康な営みを続けるために、キリスト教的敬虔の原理・本質を究明し、それを維持し、そこから逸脱しないためになされる作業、論争学をめぐる表現を利用すれば「病的逸脱をそれとして意識にもたらす」ためになされる作業が神学ということになります²⁶。

この神学体系の全貌を明らかにしている著作があります。すでに宗教哲学、弁証学、論争学について紹介する際に利用しましたが、神学各部門の諸科解題という形式でまとめられた『神学通論』と言われる小著です。1811年の初版は命題のみのわずか92頁で構成され、1830年の改訂第2版は命題のそれぞれに短い註釈を加えてそれでも全体で145頁（ともに原著の頁数）にすぎない極めて圧縮した体裁を持っています²⁷。シュライアマハーはハレ大学以来この諸科解題の講義を行い、そこからこの著作が現れることになり、さらにこの著作をテキストとして用い、講義では縦横無尽にひとつひとつの命題について詳しい解説を加えました。それは、シュライアマハーの講義を聴講したシュトラウス（David Friedrich Strauß, 1808–1874）の講義ノートによく見て取ることができます²⁸。

この『神学通論』冒頭の序論には、神学の定義、またその目的が述べられています。それによれば、神学とは実定的学問の一つ（eine positive Theologie）であり、ある一つの信仰のあり方、キリスト教の場合ですとキリスト教的敬虔、つまりキリストとの関係を通じて生起する敬虔によって全体が構成される学問のタイプに属します。

そして実定的学問とは、ある実践的課題の解決のために必要な限りでまとまりを持つ学を指しています²⁹。それでは、キリスト教神学における実践的課題とは何でしょうか。シュライアマハーによれば、それは「キリスト教会の整った指導、すなわちキリスト教の教会統治」を適切に営むことにあります。もし「それを所有し利用することがなければ」適切な教会指導が不可能になるような学問的知識、技術的規則の全体こそ神学であるわけです³⁰。

このように、キリストとの関係、そして教会の整った指導のために全体を構成するのが神学という学問ですが、この学問の全体を構成する各々の部分には、一般（世俗的）諸学問があてられることとなります。ここにはプロテスタント神学を近代的に再編したと言われるシュライアマハーの重要な学問理解が明らかにされています。キリスト教神学はキリスト教会が健全に営まれることを目的として、ただその課題遂行のために必要に応じて世俗の諸学問をその学問的作業の中に取り込んで、それらを統合し有機的な学問共同体を形成するものなのです。それゆえに、もしキリスト教会の整った指導あるいは教会統治と関係が無くなった場合、神学的作業に取り込む必要が無くなった場合には諸学問は神学的作業から外れ、それぞれがもともと所属していた学問領域に戻ることになるのです³¹。シュライアマハーは具体的にこのような学問として次のような分野を掲げています。言語学（Sprachkunde）、歴史学（Geschichtskunde）、心理学（Seelenlehre）、倫理学（Sittenlehre）、さらに技術論（Kunstlehre）と宗教哲学（Religionsphilosophie）です³²。

4.2. キリスト教神学の構成

4.2.1. 哲学的神学

『神学通論』の構成によれば、キリスト教神学は、哲学的神学、歴史的な神学、実践的の神学という三つの学問分野で構成されています³³。これまで案内してきたのは『神学通論』の序論、ならびに哲学的な神学という分野にかかわる諸課題です。この序論では神学という学知の性格（実定的な神学）とその課題（教会指導）を取り扱い、また諸宗教の比較研究を課題とする宗教哲学に言及し³⁴、哲学的な神学では（哲学的）倫理学を土台とした宗教哲学と密接に関係させつつ、キリスト教的敬虔と敬虔共同体を学問的に取り扱うための課題としてその真理性と純粋性を焦点にした弁証学と論争学を取り扱いました。

この哲学的な神学は「歴史原理の学」と規定された（哲学的）倫理学を援用していますが³⁵、それは人間存在一般を論究する哲学的作業と関係しつつ考究される神学の部門であるのです。そして、敬虔共同体一般（つまり諸宗教）の特質について宗教哲学を通して比較宗教学的な解明を志しつつ、さらにその中のキリスト教的敬虔とその共

同体的特徴、狭義にはプロテスタント・キリスト教の原理と本質を明らかにしてその真理性について解明を志す弁証学や、歴史に生成したキリスト教的敬虔共同体やプロテスタント・キリスト教共同体が、病的逸脱を避けるためにその原理・本質に則っているのかを吟味検討する論争学が哲学的神学に配置されます。要するに、哲学的神学では歴史に現れた宗教的意識の一つであるキリスト教的敬虔共同体の土台に焦点を当てて論述されているのですが、そこではただちにこの共同体の具体的な歴史的営為を点検する作業が取り扱われているわけではありません。

ちなみに『信仰論』本論はシュライアマハーによれば次に案内する歴史的な神学に属する作業になるのですが、それとは異なり『信仰論』序論では、『神学通論』の序論や哲学的な神学で論じられた事柄にかかわる内容が扱われているのです。つまり序論では「教会（敬虔共同体一般）の概念」を「哲学的倫理学からの借用命題」として、「敬虔共同体一般の相違について」を諸宗教の情報を批判的に取り扱う比較宗教学的色彩を持つ「宗教哲学からの借用命題」として、さらに「キリスト教固有の本質に則った論述」をキリスト教の真理性を課題とする「弁証学からの借用命題」として、それぞれに借用命題という副題を付けて取り扱っているのです³⁶。『信仰論』表題の「福音主義教会の諸原則に則った」という副題は、プロテスタント的原理に則って本論が叙述されているという論争学的視点を念頭に置いた表現であると言えるでしょう。

4.2.2. 歴史的な神学

それでは、歴史的に展開してきたキリスト教自体がどのような具体的特質をもって営まれてきたのかを解明する試みは、どこでなされることになるのでしょうか。それは哲学的な神学の次に配置された歴史的な神学の課題となります。この歴史（的）な神学に含まれる神学の諸学科としてシュライアマハーがあげているのは、①積義神学（聖書の積義）（die exegetische Theologie）、②狭義の歴史的な神学としての教会史（die Kirchengeschichte）、そして③「キリスト教における現在の状態に関する歴史的知識」を扱うものとして、最初に教義神学（die dogmatische Theologie）、その次に教会情報学（die kirchliche Statistik）です³⁷。

きわめて興味深いことは、この分類では現在通例の聖書（神）学、キリスト教史（教会史）、組織神学（教義学、キリスト教倫理、宗教哲学）、さらに実践神学といった四分類とは異なり、実践神学を別として聖書学も組織神学も「歴史的な神学」の中に包摂されていることです。従来のもっとも通常な分類は対象に則して分類されたものと言えるでしょう。つまり聖書のテキストを対象とする聖書学、キリスト教の歴史を対象とするキリスト教史、伝統的教説を対象とする教義学、人間の倫理的営みを対象とする

倫理神学（キリスト教倫理）、宗教一般についての理論（宗教哲学）、また教会の現場を扱う実践神学というように、それは学問の対象に従って整理された分類だと言うことができます。

しかし、シュライアマハーの神学体系はそれとは異にした分類を持っています。この通常の四分類は一見分かりやすいように見えますが、それら四者相互の体系的な関連はどうなっているのかという根本的問題を内に抱えています。そのことについて十分な回答は用意されていません。実際のところ、聖書を規範として構築されてきた伝統的教義学と近代以降に展開した聖書の批判的分析を旨とする歴史批評学を取り入れた聖書学の成果との間に生じてきた亀裂は、それを一つの原理に従ってまとめることは今にいたるも困難な課題であり続けています。

それではどのような構想のもとでシュライアマハーは歴史的な神学にこれらの神学分野をまとめることになったのでしょうか。まずはキリスト教の歴史を最初期の時代、その時代から現代にいたる中間時代、そして歴史の中の一時期としての「今」、すなわち現代という時間の順序に従う三つの時期に分類し、積義神学（聖書神学）を聖書という文書が成立したその最初期にあてはめ、教会史（キリスト教史）を二つ目の時期たる中間時代に入れ、そして現代に該当するものとして教義神学と教会情報学を配置することになります³⁸。教義学は、普遍的で不変の神のことばそのものを取り扱うのではなく、その影響を受けて今という歴史的時期に生きるキリスト教の真理性を解明するという課題を有しているものであり、神学的作業の持つ歴史性に関心が払われているということを指摘しておかねばなりません。

ちなみにシュライアマハーは教義神学をさらに二つに細分しています。「教理概念の理論的側面」としての狭義における教義学、つまりキリスト教信仰論（die Dogmatik, die christliche Glaubenslehre）と、実践的側面を扱うキリスト教倫理論（die christliche Sittenlehre）です³⁹。もっとも、これは便宜的なものでしかなく、教義神学の理論的・実践的両側面は本来は一つのまとまりあるものとして叙述されるべきであると述べています。なぜなら、キリスト教的な生の諸規則たる倫理論は当然のこととして「善なる行為にかんするキリスト教的概念の展開として理論的な諸命題」でもあるからです⁴⁰。教義神学と併行して現代に位置づけられた教会情報学という分野の課題は、一教派にとどまらない世界大のキリスト教会の内部諸事情、ならびに他宗教との外的関係、社会事情との関係などを探究するものです⁴¹。宗教哲学が諸宗教についての具体的情報を吸収して批判的に分析することだとすれば、教会情報学は世界におけるキリスト教の活動について具体的情報を収集・検討する分野だと言えるでしょう。

興味深いことですが、教義学者としてシュライアマハーは『信仰論』（『キリスト教

信仰——キリスト教会の諸原則に則って体系的に叙述された——』という古典的なテキストを公にしていますが、それは彼の神学体系全体の中の歴史的神学の、「キリスト教の現在の状態に関する歴史的知識」を対象として構成された分野の、さらに教義神学に属する「キリスト教信仰論」という狭義の教義学を扱ったものに過ぎなかったのです。

4.2.3. 実践的神学

実践的神学とはこの哲学的と歴史的という神学両部門で用意され、整えられた知見を実際の教会共同体の現場の活動に適用していくための学問ということになります。シュライアマハーの学問分類によれば、これは技術的学問 (technische Disziplin) であり、上記両部門で獲得された理論や諸事情を踏まえて、それを現在の教会現場に適用する、つまり理論を実践に適用するための技術にかかわる学であるのです⁴²。実践的神学が三部門 (Trilogie) の一番最後に置かれていることはシュライアマハーにとっては必然的です。『神学通論』の序論の第27命題で「歴史的な神学はキリスト教の理念との真実の関係を持つそれぞれの時期を叙述するものであり、それは同時に実践神学の根拠を示し、また哲学的な神学を実際に保証する」ものだと述べています⁴³。それゆえに、『神学通論』は、第28命題で歴史的な神学を「神学研究の本来の幹 (Körper、躯体) である」とするのです。ちなみに『神学通論』の初版では、歴史的な神学を「幹 (躯体)」と表現するのみならず、この三分野を植物に類比させて哲学的な神学を根っ子 (Wurzel)、そして実践神学を結実し、花を咲かせた花冠 (Krone) と表現しています⁴⁴。神学の各部門は、それぞれ役割を持ち、それぞれの課題を担って相互に密接な有機的な関係を有しており、それらのいずれを欠いてもキリスト教会の整った指導は不可能になるのです⁴⁵。

5. 伝統的教義学とシュライアマハーによる神学の再編

5.1. 聖書靈感説に基づく伝統的教義学

このような神学の構成は伝統的な神学 (教義学) とどのように違うのでしょうか。宗教改革以降、とりわけ17世紀のプロテスタント神学 (Protestantische Orthodoxie) は、中世に築き上げられた壮大なカトリックの神学体系に比肩する体系を構築するための努力に捧げられました。その過程で聖書と伝統 (聖伝) の両者を土台とするカトリック神学に対抗して神学の根拠をただひたすら「聖書のみ」 (sola scriptura) に基づく教説を構築することになりました。その最たるものは聖書の言葉は神の靈感を受けて書き記されているために逐語的にそれは無謬であるという逐語靈感説 (Verbalinspirationslehre) です。換言すれば、聖書は神の靈感を受けた啓示の書であ

るゆえに神のことはそのものであり、その無謬の神のことはたる聖書の内容を整理整頓することが神学（教義学）の課題となりました。そうすると、そこでは、見えない神のことはそのもの、それが啓示をとおして文字に顕現した聖書のことは一句一句、さらにそれを整理整頓した神学（教義学）という三つのものは、一直線に同質的に繋がってしまいます。その結果、神のことはそのものを整理整頓した神学は、世俗の一般諸学問とは次元を異にするものとなり、この世界に唯一絶対的で決定的な權威性を主張することになりました。『宗教論』でシュライアマハーはこれらの人々を「字句に拘泥する神学者たち」（Buchstabentheologen）と皮肉を込めて表現しています⁴⁶。

5.2. キリスト教的敬虔に基づくシュライアマハーの神学

これに対してシュライアマハー神学の大きな特徴は、神のことはそのものを取り扱うわけではないことです。それは若い時代にカントの認識論と格闘したシュライアマハーの到達した成果でもあるのですが、神学的作業の出発点は、啓示そのものではありません。そうではなくて、神学は啓示によって人間の内面世界に着床した神のことはによって生起した敬虔（宗教的意識）にその根拠が求められます。天上のことは、啓示の影響のもとに成立した人間の敬虔に視点が移されることとなります。しかし、この啓示を大前提にしているという点では、弁証法神学による、神のことはを扱わず、神学を人間学へと頽落させたという批判は性急にすぎると言えるでしょう。

一般的に言えば、敬虔は神のことはに影響を受けて人間の心の中に生起した宗教的意識、キリスト教的に言えば、敬虔とは、イエス・キリストの十字架と復活による贖罪の出来事の影響下に生起したキリスト教的宗教意識（キリスト教信仰）です。つまり、敬虔とは神のことはそのものではなく、その神のことはの働きを受けた個々人の心の事実であり、それこそが人間の敬虔な生活姿勢を創出し、この歴史世界において人間を動かす動因となるのです。要するに、神学は決して啓示と無関係にあるわけではないけれども啓示そのものではなく、啓示の働きをとおして人間の心の世界に心の事実として成立したものを対象とするのです。敬虔という人間の心の事実から出発するという意味では、神学は一種の現象学的な営為であるということもできるかと思えます。

そして、敬虔という人間の心の事実から出発するという場合の重要な特徴は、キリスト教神学は啓示そのもの、神のことはそのものを取り扱う伝統的な教義学的作業ではなく、それゆえに神学は一般諸学と全く次元を異にする学であるわけではなく、神のことはが人間の心に着床して成立する心の事実から出発するかぎり、それは人間自体を学問的対象としたあらゆる世俗の学を必要に応じて敬虔とその共同体の考察に適用できることとなります。そこに神学とは世俗的一般諸学問を結集した一つの有機

的学問共同体であるという理解が成立することになります。

6. 結び

最後になりましたが、これまでの案内を振り返って現代におけるシュライアマハーの意義について二つのことを指摘いたします。最初に、現代世界、とりわけキリスト教とは異なる始源を持つ日本の宗教文化を念頭に置いた意義です。この世界には諸宗教が存在すること、種々の宗教性があることをシュライアマハーは原理的に認めていました。たとえ、それらの中でキリスト教こそ最も洗練された宗教（「敬虔の目的論的方向に属する一神論的信仰の在りよう」）であると見なしていたにもかかわらずです⁴⁷。そのためにキリスト教的敬虔にとどまらず、宗教一般の根底として敬虔一般の理論を唱え、各宗教の特性についてはこれを宗教哲学（比較宗教学）的に探究して、宗教一般におけるキリスト教の位置を問ひ尋ねようとする事に向かいました。宗教間の軋轢ではなく、相互宗教間対話の重要性がさかんに喧伝される現代世界において、シュライアマハー的なパラダイムは今後さらに注目されていくべき内実を含んでいると言えるでしょう。

第二に、すでに伝統的教義学と聖書の歴史批評学との乖離について言及しましたが、近代以降、神学自体がまとまりのない姿を、キリスト教信仰（敬虔）そのものを知的に解明しようとする神学各部門は現状においては一つに統合しがたい姿を呈しています。しかし、ドイツ観念論の時代に生きたシュライアマハーにとっては敬虔が本質的にまとまった一つのものである以上、それを知的理論的に解明する学である神学も必然的に一つにまとまったもの、有機的体系的な質を持つものでなければならないということは自明のことでした。現代のキリスト教神学を念頭に置いた時に、シュライアマハーの問題提起は決して忘れ去られるべき事ではなく、常に課題であり続けているということができると言えるのです。

注

- 1 本稿は、2020年1月14日（火）（13時15分～14時40分）に、同志社礼拝堂で、同志社大学神学部基督教研究会主催の講演会で話した内容に加筆修正、注釈を加えて原稿化したものである。本稿では便宜的に、以下の三著、『宗教論』Über die Religion. Reden an die Gebildeten unter ihren Verächtern. は1799年の初版（以下 Reden¹と略記）、Kritische Gesamtausgabe, 1980-(KGA), I.Abt., Band 2, hrsg.von Günter Meckenstock, Berlin/New York 1984を、『信仰論』Der christliche Glaube, nach den Grundsätzen der evangelischen Kirche im Zusammenhange dargestellt（『福音主義教会の諸原則に則って組織的に叙述されたキリスト教信仰』）は1830/31年の第2版（以下 CG²と略記）、KGA, I.Abt., Band 13 (Teilbände 1/2), hrsg.von Rolf Schäfer, 2003を、『神学通論』Kurze Darstellung des

theologischen Studiums. Zum Behuf der einleitender Vorlesungen (『神学研究の簡潔な叙述。入門的講義のために』)は1830/31年の第2版(以下KD²と略記)、KGA, I.Abt., Band 6, hrsg. von Dirk Schmid, 1998を利用する。引用の際の頁番号はKGAの頁を、括弧に入れて原著の頁を表示する。KDについては命題番号のみを記載する。

引用は私訳を施したが、『宗教論』では、佐野利勝・石井次郎訳(岩波文庫)、高橋英夫訳(筑摩書房)、深井智朗訳(春秋社)を、『信仰論』では、今井晋訳(白水社『現代キリスト教思想叢書1』)を、『神学通論』では加藤常昭訳(教文館)を適宜参照させていただいた。

- 2 波多野精一『宗教哲学序論』1989年(1940年刊行)、岩波書店、「第四章 歴史的瞥見」「三 シュライエルマッヘル」。『宗教哲学』1972年(1935年刊行)、岩波書店、「第一章 実在する神」。
- 3 石原謙訳著『シュライエルマッヘル宗教論』内田老鶴圃、1914年。これには「シュライエルマッヘル詳伝及び其の『宗教論』内容解説」が付されている。その後六つの邦訳版が出ているがすべて初版の訳である。この邦訳にみられる初版への注目は1899年にこの初版を編集し註釈を加えて出版したルドルフ・オットー Rudolf Otto の校訂本の影響だと見なされる。ちなみに、『宗教論』はシュライアマハーの生涯でその後3回改訂され、最終版の第4版は彼の死後、19世紀に現れた全集 *Sämtliche Werke Schleiermachers* に掲載されることになった。現在刊行中の批評版全集第12巻に2~4版が4版を比較参照の基準にして収められている(KGA, I. Abt., Band 12, hrsg. von Günter Meckenstock, 1995)。
- 4 高森昭「日本におけるシュライエルマッハー研究の70年(1914-1984)」『神学研究』33巻、124頁。
- 5 このあたりをテーマとしたものに、加納和寛「プロイセン式文論争と使徒信条-ドイツ『使徒信条論争』前史としての視点から」『基督教研究』78巻1号、2016年、同「シュライアマハーの使徒信条理解-プロイセン式文論争を中心に」『基督教研究』78巻2号、2016年がある。なお、両論文は加納和寛『アドルフ・フォン・ハルナックにおける「信条」と「教義」-近代ドイツ・プロテスタンティズムの一断面-』教文館、2019年に収められている。
- 6 ティリッヒ『キリスト教思想史II』(『ティリッヒ著作集』別巻3、白水社、1980年)、24頁。
Christian Lülmann, *Schleiermacher, der Kirchenvater des 19. Jahrhunderts*, Tübingen 1907. (<https://portal.dnb.de/bookviewer/view/1114145815#page/89/mode/1up>, 2020/08/15閲覧)
- 7 Robert Stalder, *Grundlinien der Theologie Schleiermachers. I. Zur Fundamentaltheologie*, Wiesbaden 1969, S.IX. ケーン、またチュービンゲン学派についてはM・グラープマン『カトリック神学史』(下宮・藤代訳)、創造社、1971年、279頁以下参照。
- 8 KGA, II.Abt., *Vorlesungen*. 第1部門は公刊された著作類(15巻)、第2部門は諸講義(23巻予定)、第3部門は説教(15巻)、第4部門は翻訳類(8巻予定)、第5部門は書簡類(14巻+註釈4巻予定)。
- 9 シュライアマハーによる旧約聖書の取り扱いをめぐるのは、高森昭「シュライエルマッハーの旧約説教に関する一考察」『神学研究』41巻、1994年、51~72頁参照。
- 10 伊藤慶郎『シュライアマハーの対話的思考と神認識-もうひとつの弁証法-』見洋書房、2013年。
- 11 『現代キリスト教思想叢書1』白水社、1974年に深見茂訳としてシュライアマハーの説教が6編収められている。これはシュライアマハー生誕200年を記念してHeinz Bolliが編集した *Schleiermacher Auswahl, Siebenstern-Taschenbuch*, 1968を定本としている。ちなみにこのペーパーバック版は、その後書きをKarl Barthが書き、その年にバルトが亡くなったことにより大きな話題となった。この後書きは、『神学者カール・バルト』日本基督教団出版局(アルパ新書)、1971年の中に蘇光正訳で収められている。さらに、高森昭「シュライエルマッハーの死生観-愛児の墓前における式辞を通し

- て」(『なぜキリスト教か』創文社、1993年、231～240頁)は1829年10月29日に9歳で亡くなった長男のナタナエルの墓前礼拝でのシュライアマハー自身の説教の邦訳・案内である。数少ない論稿としては、石井裕二「説教論におけるシュライエルマッハーと現代」『基督教研究』36巻1号、1970年、42～60頁。さらに高森昭「シュライエルマッハーの旧約説教に関する一考察」(上掲註9参照)。
- 12 <http://www.baika.ac.jp/~sgjapan/works.html#03>, (2020年1月閲覧、執筆は筆者) 参照。
一般に改革派の牧師は **Prediger** と呼ばれているので、これまでのシュライアマハー紹介書では「説教者」という表現が数多く見られる。
- 13 いくつか説教関連の文献を掲げておく。Kleine Schriften und Predigten, 3 Bde., Berlin 1969, hrsg. von Hayo Gerdes/Emanuel Hirsch, Berlin 1969/70; Wolfgang Trillhaas, Schleiermachers Predigt und das homiletische Problem, Leipzig 1933. なお、Schleiermacher Handbuch (hrsg. von Martin Ohst, Tübingen 2017) には彼の説教についての案内と重要文献が掲げられている。
- 14 Reden¹, 2.Red. Über das Wesen der Religion, S.211f. (S.50–53).
- 15 CG², 1.Teilband, Satz 3, S.19ff. (S.7ff.); Satz 4, S.32 (S.16ff.). なお初版 (CG¹) では Satz 8, S.26ff. (S.26ff.); Satz 9, S.9ff. (S.33ff.) を参照。
- 16 Reden¹, 5.Red. Über die Religionen, S.316 (S.291). 「墮落と救済、敵対と和解といった両者が互いに分かちがたく結びついているのがキリスト教の根源的直観である。この直観を通してキリスト教におけるあらゆる宗教的素材の形態とその全体的形式が規定される。」
- 17 CG², Satz 11, S.94 (S.74). 「キリスト教は目的論的な敬虔の方向に属する一神教的信仰姿勢であり、ナザレのイエスによってもたらされた救済にすべてが関係していることによって他の信仰様式とは本質的に区別される。」
- 18 Reden¹, 2.Red. S.212 (S. 52f.).
- 19 現在入手可能なものは Brouillon zur Ethik (1805/06); Ethik (1812/13), Philosophische Bibliothek Bde.334; 335, Hamburg 1981.
- 20 Philosophische Ethik (哲学的倫理学) と Christliche Sittenlehre (キリスト教倫理論) とをシュライアマハーは区別する。哲学的倫理学を現代風に言い直せば、これは文化哲学、歴史哲学、価値哲学あるいはそれらをすべて内に含み込むものだとと言える。Hans-Joachim Birkner, Schleiermachers Christliche Sittenlehre. Im Zusammenhang seines philosophisch-theologische Systems, Berlin 1964, S.37参照。ちなみに Christliche Sittenlehre は Christliche Glaubenslehre (キリスト教信仰論) とともに歴史的の神学の一部門である教義神学 die dogmatische Theologie を構成する契機である。本来は一つであるべきこの両者は便宜的に分けられている。KD², Satz 223参照。
- 21 ①は哲学的倫理学が、②は『宗教論』では第2講、『信仰論』(第2版)では「倫理学からの借用命題」が、③は『宗教論』では第5講、『信仰論』(第2版)では「弁証学からの借用命題」が課題としている。
- 22 Reden¹, 5.Red. S.294 (S.237f.). 「私はいわば肉となった神のもとに君たちを導きたい。私は、その無限性を放棄し、しばしばそのみすばらしい姿で人間たちに現れた宗教を君たちに示したい。君たちはもろもろの宗教の中に宗教そのものを発見すべきなのだ。この世にあって不純な仕方では君たちの前に立つものに天上の美の個々の特徴を捜し求め、私はその(天上の美を持つみすばらしい)姿を描き出そうとしてきたのだ」。

Vgl., Joachim Ringleben, die Reden über die Religion, in: Friedrich Schleiermacher. Theologe-Philosoph-Pädagoge, Göttingen 1985, S.255. (この論考は Schleiermacher Handbuch (hrsg. von M. Ohst), S.102–117に増補再録されている)。さらに拙稿「シュライエルマッハーの個性概念とその現代的意義」

- 『基督教研究』64巻2号、101-108頁参照。
- 23 KD², Satz 23参照。ここでシュライアマハーは敬虔諸共同体相互はどのように、どの程度に相違するのかを探究する場所としての宗教哲学に言及している。この諸宗教の比較を通してそれぞれの敬虔共同体に固有の特徴もまた浮き彫りになる。この宗教哲学は、教会指導のための学たる神学的作業が常に考慮すべきものとして『神学通論』序論で言及されている。さらに Satz 6, 註釈 (Erläuterung)、Ulrich Barth, *Theorie der Theologie*, in: *Schleiermacher Handbuch*, hrsg. von M. Ohst, Tübingen 2017, S.316-327. ここでは S.317f, S.321参照。
- 24 これは哲学的神学の課題である。KD². *Von der philosophischen Theologie*, Satz 32-68.
- 25 CG², Satz 3, S.19f. (S.7ff.) さらに Reden¹, 2.Red, S.211f. (S.50ff.). 「宗教の本質は思惟でも行為でもない」「実践は技術であり、思弁は学問である」参照。
- 26 KD², Satz 40参照。
- 27 KGA, 1.Abt., Bd.6に初版 (1811年) と第2版 (1830年) が合わせて収められている。KD¹, S.243-315, 1811; KD², S.317-446, 1830.
- 28 Friedrich Schleiermacher. *Theologische Enzyklopädie* (1831/32). Nachschrift David Friedrich Strauß, hrsg. von Walter Sachs, *Schleiermacher-Archiv Bd.4*, Berlin/New York 1987.
- 29 KD², Satz 1 und Erläuterung 参照。
- 30 KD², Satz 5参照。
- 31 KD², Satz 6参照。
- 32 KD², Satz 6, Erläuterung 参照。
- 33 KD², Satz 31にはこの *Trilogie* (三部門) でもって神学研究の全体は完結し、その配列の順序は哲学的神学で始まり、実践的神学で終わることに言及してその体系的特徴を論じている。
- 34 宗教哲学が序論に置かれているのは、この分野が倫理学と関係しつつ、キリスト教そのものではなくその前提である諸宗教を取り扱っているためであろう。KD², Satz 23参照。
- 35 KD², Satz 35では (哲学的) 倫理学を「歴史原理の学」(*Wissenschaft der Geschichtsprincipien*) だと規定している。つまり、人間精神に生成する (*geschehen*) 在りよう、つまり歴史と成る原理を一般的に叙述するものと説明している。
- 36 CG²序論は、「教義学の解明」と「教義学の方法」の2章構成になっており、そのうちの「教義学の解明」は四つの節に分けられ、最初の第1-3節で倫理学、宗教哲学、弁証学からの借用命題が取り扱われる。第4節は教義学とキリスト教的敬虔の関係を扱う。
- 37 KD², II.Teil. *Von der historischen Theologie*, Sätze 69-256. 上記注35に言及した歴史原理の学たる哲学的倫理学との関係では、歴史的な神学は歴史となった事象 (キリスト教) を課題とする。
- 38 KD², Sätze 195-250.
- 39 KD², Satz 223参照。この命題では、理論と実践を分けるこの分類は便宜的なもので、福音主義教会にとって決して根源的なものではないことに言及する。命題の註釈によれば、この両者を分けて便宜的に表現しているにしても、将来において両者は統一的に把握されるべきことが語られる。
- 40 KD², Satz 223, Erläuterung.
- 41 U. Barthはこの教会情報学と訳した *die kirchliche Statistik* を後代の *empirische Konfessionskunde* ないしは *Kirchensoziologie* の領域を取り扱うものとし、それは一教派にとどまらず全キリスト教会を念頭に置いていることを指摘している。*Theorie der Theologie*. in: *Schleiermacher Handbuch*, S.324参照。さらに同じ *Handbuch* の *Kirchliche Statistik* を担当した Simon Gerber は当時の用語としての *Statistik* は国家学 *Staatenkunde* のことであり、国家をめぐる政治・経済・地勢・文化などの諸事情

を記述するものであったとし、シュライアマハーの用語における die kirchliche Statistik を Kirchenkunde/kirchliche Zeitgeschichte と説明している。S.345参照。

- 42 KD², Satz 25では Technik と表現されている。H.-J. Birkner, Schleiermachers Christliche Sittenlehre, S.53f. 参照。
- 43 KD², Satz 27.
- 44 KD¹, Einleitung, Satz 26/31/36, S.253f. 参照。なお KD²での「幹」表示は Satz 28参照。
- 45 『神学通論』に基づく神学の構図

キリスト教神学の体系		
哲学的神学	歴史的な神学	実践的な神学
倫理学+ (批判的学科)	経験的歴史学	技術的学科
(宗教哲学) 弁証学 論争学	積義神学 教会史 教義神学・教会情報学	教会奉仕 教会統治

宗教哲学はシュライアマハーの学問体系では、「歴史的所与を思弁的に繰り広げられた形式的世界に關係づける」批判的学科 (kritische Disziplin) に属しており、哲学的な神学と密接に關係しつつその前提となる諸宗教を扱う。『神学通論』では序論の Satz 23と哲学的な神学の弁証学を論じる Satz 43の註釈で言及している。また、技術的学科 (technische Disziplin) とは、「正しい振る舞いの仕方を問うことにかかわる」学であり、『神学通論』では哲学的な神学と歴史的な神学で獲得された適切な理念と事象を実践の現場である教会に適用しようとする学である。批判的学科に分類されるものとして、シュライアマハーは宗教哲学以外に、美学、国家論、法哲学、文法論を挙げ、また技術的学科として、実践神学以外に、教育学、政治学、解釈学を挙げている。H.-J. Birkner, Schleiermachers Christliche Sittenlehre, S.34ff. 参照。

- 46 Reden¹, S.201 (S.29) 参照。さらに2コリント3:6「文字は殺しますが、霊は生かします」参照。
- 47 CG², Satz 11, S.93 (S.74).

